

故渡辺和子さんが記された『したい性と主体性』というコラムがあります。そのなかで渡辺さんは、自分の思い通りに生きることが「主体性」だと思われて、「したい性」が伸び放題になっているのではないかと危惧されています。「あれが食べたいこれが食べたい」と、自分の「したい性」ばかりに従って生きていくと、栄養バランスを崩し、健康を害してしまいます。自分が欲するものと自分に必要なものが、同じであるとは限らないからです。それゆえ渡辺さんは、「したい性」を抑えてでも、“したくてもしない”という「主体性」を磨いていくこと、すなわち、一時的・衝動的な自分の欲望や正義感に流されるのではなく、自分を将来的に幸せにし、自由に導くであろう道を選ぶような意志を育てていくことが大切であると提言されています。

本日のイザヤ書には、古代イスラエル（南ユダ王国）の民が、神の望むところに従わず、自分達の「したい性」に従って歩んだ「背信の記録」が記されています。民は、神の意志を告げる預言者イザヤに向かって「真実を我々に預言するな。滑らかな言葉を語り、惑わすことを預言せよ」と反発しました。人々は、イザヤの言葉が「真実」であると認識していたにもかかわらず、それは、自分達に不都合な真実であったが故に、「語ってくれるな」と退けたのでした。しかしその結果、自分達を守るために選択したはずの他国との同盟関係の「崩壊は突然、そして瞬く間に臨」み、南ユダ王国は滅びの一途を辿ることになっていきます。「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見出す者は少ない」（マタイ福音書 7:13～14）という主イエスの言葉が思い出されます。

とは言え、その「狭き門」から入ることは容易ではありません。イザヤは、そんな私達を受け止めるかの様に、「後の日のため、永遠の証し」として、人間の「背信の記録」を書き残しました。新約聖書に至っても、イエスの道に従い切れず、イエスを見捨て、裏切り、その結果、自らの弱さに落胆していく弟子達の「背信の記録」が記されています。しかし、その様にして人間の限りに出会う時は同時に、神の真が、イエスの語っていたことが本当に正しかったと身につまされる時でもあります。「したい性」に従って自ら招いてしまうつまずきの時。しかしその時はまた、「お前たちは、立ち返って、…信頼していることにこそ力がある」と言われる神の招きを新鮮さを持って受け取り直す時、そしてそれ故に、主イエスが私達に必要なだと思って示された道に従って生き直そうとする「主体性」が磨かれていく機会ともなるのです。

（文責：望月達朗牧師）

